

旧曆六月二十三日

福部庵比佐伍・作

旧曆の六月二十三日は、金木町川倉の賽の河原地蔵尊の大祭である。

男は、何もかも忘れ、仲間と同人雑誌作りに熱中していた。勤めの帰りに、駅前の農業会に立寄った。昨年まで勤務していた事務室には誰も居らず、暗い裸電球が一つポツンとあたりを照らしていた。当直の職員は奥の宿泊室でラジオでも聞いているのか、出てくる様子もない。男はなんとなく電話室に入り込んで電話機のハンドルをぐるぐる回して受話器を取った。——何番へ……。と交換手の声が伝わってきた。何処へかけるという当てもなくハンドルを回したのだが、電話の向うから聞き覚

えのある声が耳に伝わってきた。
「Tさんか。……今夜賽の河原へ行ってみないが?……。」暫らく沈黙があった。

「行ってみたい……!。」少し上ずったような声が返ってきた。
「それじゃ、七時に山源の煉瓦塀の前で待っている……。」と言って電話を切った。なんとなく電話して、なんとなくこんな約束が出来てしまった。

彼女を男の仲間たちは「デブT子」と呼んでいた。勿論内緒の呼び名である。決して「デブ(肥満)」と言われる程太っているわけではない。いわゆる健康優良児の体軀である。

終戦前後は、食糧難から誰もが栄養失調に近い瘦せた人が多く、米の生産地でありながら化学肥料も農薬もない時代で、働き手のいない田圃は荒れ果てて、一反歩からの収量も六〜七俵といったところか。それも一人当りの保有米は、翌年のための種子と、年齢別に一日何合と決められていて、そのほかは全部供出割当てされる。農家であっても腹いっぱい喰べられなかったのである。

〔註〕昭和十五年四月二十四日、米・塩・衣類など生活必需品十品目が配給切符制度となり、米は、六歳から十歳まで二〇〇グラム(約一合四勺)、十一歳から六十歳までは三〇〇グラム(約二合四勺)の配給となり、生産者と雖どもこの基準で保有米が計算され、他は強制供出させられた。彼女にくらべて他の娘たちはスリムであったし、もう一つの理由は、T子という娘がもう一人居たことからそのように呼ばれるようになったのである。

その後、山源の赤煉瓦塀の前の石柱に腰掛けていた男があった。道路との境界を示すこの等間隔に建てられた石柱と石柱の間には太い鉄の鎖でつながっていたものだが、戦時中軍による強制徴発で今は石柱だけが寒々と立ち並んでいる。

七時十分前に来た男の服装は、白の長袖ワイシャツを腕まくりし、ズボンの中に入れて裾の両はじを前で結んで、ハンチングを頭に乗せ、黒のズボンに下駄履き、伊達眼鏡をかけた不良っぽい姿で北側を向いて坐っていた。

カタカタと下駄の音を響かせながら、ゆるい坂道を小走りに彼女は息をはずませながら男が坐っている石柱の前でピタリと足を止めた。約束した人と違う若者と思ったのか、一瞬一歩後へ下がった。男は、「行くが……」とゆっくり立ち上った。彼女は汗をかいたのか白いハンカチで小鼻のあたりを拭きながら「あア、びっくりした。誰かと思った……。」

「近道を行こう。」男が先に立って歩き、二〜三步後を彼女はついて行く。この道は、町の人か、嘉瀬・喜良市など周辺の村人たちより歩かない畑の作場道である。街を出て左手に火葬場を見て、津鉄の線路を越えて畑道になった。道巾は三尺(一米)ぐらいか、左側にはりんご園の防風林として落葉松の並木が続き、そこを過ぎれば急な坂道に入ってゆく。足もとが悪く、薄暗い中を電池もなく唯悪路に全神経を集中して進んでゆく。

芦野の畑地帯と七夕野の秣場の丘陵の間の深い沢地から集められた沢水が藤枝溜池へ流れ落ちる妻ノ神川には一丈(約三米)ほどの丸太が四本渡されており、二人はおっかない(不安定な)腰つきでソロソロソロリと渡った。目の前には、老松の陰にお堂が見えて異様な雰囲気(ふんいき)が漂う様に伝わってくる。

「この坂を上れば、すぐお堂だ……。いいナ、大丈夫だナ……。」「うん。……。」彼女は、上ずった声を出して、遂に男のワイシャツの裾を握りしめていた。距離は短いが坂は急であった。左側の藪の中に根本が腐りかかった径五寸ほどの杭に「蛇塚」と薄れた文字が読まれる。「足もとに気をつけろ……。」一言も言

わずに彼女はワイシャツの裾を離さない。登り切ったところが参道だった。彼女は汗かきらしく、参道に着いたところで一息入れ、上気していた顔や首の汗をふく。参道の両側には、数百年前からどっしりと腰を据えつけたと思われる老松が、あちこちへ太い根を張りめぐらしながら並木を作っている。その老松と老松の間に露店が並んで、カーバイトを燃やすアセチレンガス灯が悪臭を撒き散らし、簡単な天幕を雨除けに張ってあるが、とても屋台とは言えない、両脇にりんご箱三個づつ重ねて台としその上に戸板を乗せたという風の店である。売っているものと言えば、玩具の店が二軒、氷水屋が一軒、その他何処から食材を仕入れ来たのかおでん屋が大きな鍋から湯気を上げて、食欲をそそる匂いを発散させて道行く人々の足を止めさせている。不思議なことには商品が何も並んで居らず、入口に氷を入れた大きな水桶を置いただけの茶屋(?)が広い面積を取り、荒蕪の上にゴザを敷いた座敷を作っているのが三軒ほどあった。

まずは地蔵様に参詣を、とお堂の中へ二人は入って行った。中は、香煙蒙々とたちこめて天井から赤い幼児の着物やわらじなど所せましとぶら下がり、幻想的というか、異様というか、おどろおどろしい何んとも形容し難い様相であった。正面の丈余もある木像の地蔵尊に合掌した。脇にも二体、少し背の低い地蔵様、また足下にも何体かの地蔵群、それぞれに供物が山のように供えられ、ローソクが立ち並び線香から煙りが立ちのぼっていた。

光景がふと脳裏をよぎった。積み上げられた周囲には、ローソク線香が直に地面に立てられ、微風にゆらめいて幻想的な風景をかもし出している。

イタクの小屋は、上に天幕を張り、三方をヨシズで囲った簡単なもので、開かれた方の前にはおが様連中が連がり、咽び泣きの声があちこちに聞こえてくる。

盲目のイタクが多く、親指ほどもある黒光りする玉の数珠を回しながら独特の節回しで仏おろしの口寄せをしている。どの小屋も満員で弓の弦を鳴らしながら祭文を唱えているイタクも居る。イタクの傍には、介添えの若い女が小型の竹行李の中に口寄せ料を入れたり、依頼者の順番を決めたり忙しく立ち働いていた。

二人は暫らく、涙を流しているおが様連中の後に佇んで聞いていた。彼女はわかっているのかわからないでか、いや周囲のふんいきに誘われてだろう貰い泣きをしていた。

男は、「おい、行こう……」彼女の肩を小突いた。二人は無言のまま立ち上って堂の裏を回って、参道と丘陵の間、盆地になつてゐる所の踊り場の方へと足を運んだ。既に踊りの輪が作られていて、月の出ていない暗い晩なのに

へ今夜のお月様 青山抱いて

おらも抱きたや 十七・八

などの歌声が聞こえる。泣いて 笑って 踊って、今夜は参詣人にとって年一度の最高のお楽しみの日なのだ。

堂の右手北側窓の下に一段高い座に机を並べ数人の僧侶と講中の役員五、六人で諷誦文の受付けで筆を走らせ、読経の声、鐘の音が響くその前には身内を亡くした信者たちであろう順を待って列をつくって並んでいた。

男は、彼女をそっと突っついて地蔵尊の裏手の方へ回った。そこには段々が天井近くまで設けられ、数百体、いや千体以上の小さな石地蔵が所狭しと安置されている。年に一度の衣替えか、真新しい男の子、女の子の着物が着せ替えられ、又豆しぼりの手拭いを首にかけられた地蔵様、いろいろな布地の頭巾や赤いビロ掛け(よだれがけ)を着けたもの、様々である。お堂の両側の板壁にも、わらじ、草履や死者が生前身につけたであろうシャツやズボンなどいっぱい掛かけられていて、それぞれの供養の品々で埋めつくされていた。

中年のおが様たちは、どの地蔵様にも分け隔てなく線香、ローソクを立て、口の中でぶつぶつ自宗派のお経でも唱えているのだろう、入れ代り、立ち代り拜んでいく。

信仰のない若い男女は邪魔にならないよう、お堂の外へ出た。お堂の南側の空地には十カ所ほどのイタクの小間が設けられている。一坪ほどの小さい小間である。又、先程上ってきた蛇塚のある附近には、数カ所石を積んだ場所がある。地蔵和賛に歌われる「一重積んでは父の為、二重積んでは母の為、積めば崩され……」幼子が賽の河原で鬼に責められ、崩されるのを、もみじのような小さな手から血を流して又積み上げる。という

先刻見たお茶屋は、休み処なのだった。数人のおが様たちがゴロ寝して身体を休めている。踊りの輪も大分大きく広がっている。踊りの輪の中から、すーと抜けてゆく手拭いで頬かぶりした男女の二人連れが丘の陰の方へ行った。彼女も、そちらに何かあるのかとも思ったのか、足を向けた。——「おい、そっちへ行くな……。戻ろう。」男は怒ったように言って参道の方へと足速やに歩いた。彼女はあわてて男のワイシャツの裾にしがみついできた。この暗くなった異様な雰囲気の中に残り残されることを恐れたのだろう。

川倉の村の方向へ五十米ほど歩くと十字路になつていて左へ曲った。両側はリンゴ畑である。淋しい道を更に百米も進んだらうか県道に出た。彼女はそこで男のワイシャツから手を離れた。

七時に待ち合わせ場所からずーと歩きどうしだった。一度も腰を下ろして休んでいない。流石若い二人でも大分疲れた。とに角九時前には彼女を送り届けなければと気が急いでいるが男の方が参った。津鉄の踏切りを越え、芦野公園駅前に来た時、「少し休んで行こう……」と駅舎の外腰壁に設えた木製の長椅子に先に坐り込んでしまった。彼女も男の傍に無言で静かに腰を下ろした。

——「どうであった……。」「うん……。怖かった……。」「並んで坐っていると彼女の体温が伝わってくるような気がして息苦しくなり、十分ほど休んだらうか、男は立ち上がった。休んだ

後は却って疲れがひどくなったような気がしたが、早く彼女を送り届けようという気持が先行して、二人は又会話もなく歩き続けた。

局の裏口のガラス戸を開けて中へ入ったのを見届けてから男は自転車に跨った。振り返って見ると、彼女はガラス戸の内側に立っていて見送ってくれた。

旧暦六月二十三日の夜の二時間であった。

—昭和二十二年八月の日記から—

《註、男は後年、川倉賽の河原地蔵講中総代なども務めた八十歳過ぎの長老から次のような話を聞いた。〃ワダシは、地蔵講の役員を五十年近くも務めましたじや。川倉賽の河原地蔵尊は、下北の恐山（日本三大霊場の一つ）を開基した慈覚大師が開いたものと言ひ伝えられていますのじや。ここが特別有名になつた理由が三つあるのさ。その一つは寄進された石の地蔵様の数の多い事。二つには、イタコ（巫女）が多く集ること。三つ目は、旧六月二十三日夜に限って女の性が解放されること。

この日は、近郷近在をはじめ陰（山の陰の意、東津軽郡）からも、遠くは松前（北海道）などからも参詣者が来たもんだ。それはやはり幼くして亡くした悲しい子供の供養や、戦争に取られて帰って来ない夫をイタコに仏おろしをしてもらう事、それよりも何よりも、何年も我慢し続けた身体のはてりを、この夜ひと夜だけは十分に満したいという思いもあつたんじゃないかなあ……。

じのとおり夜露が降りても濡れないように、地面に敷くものだね。……それから梅干しは、……これはまた生活の知恵とでもいうもんでしような。……避妊のためなんだ。イタコの仏おろしで、亡くなった夫のため涙を流し、それから盆踊りでひと汗流し、空腹になつたところで休み茶屋で風呂敷包みをほどこいてニギリメシを喰う。その時ニギリメシの中に入れてきた梅干しは紙に包んで懐にしまって置くんだね。ひと休みしたところで、手拭いで頬かぶりして又踊りの輪に入つてゆく。……その中で相手が見つければ、二人でそつと踊りの輪から抜けてゆく。場所が明るいうちにある程度見当をつけておくのだろう。この場では殆んど女子が主動的だね……。

昔の女子は、ズロースなんて穿かない。腰巻だね。赤い腰巻を着けていたのだよ。男も申又より禪の人が多かったね。

——女子は、事をはじめの前に、自分のまんじゅう（女性器）の中に梅干しを押し込むのだ。梅干しの酸で男の精子を殺してしまふというんだらう。終戦後は、男が鉄兜（軍隊で支給したゴムサック）を持ってきて使うのも多くなつたね。……やはりサックの方が安全なものね……。

事を済ませた後は、休み茶屋でゆつくり眠り、二十四日には晴々とした顔付きで家へ帰ってゆくんだね。休み茶屋では雑魚寝だ、旅の女子たちが多かったね……。

——さあ、その翌日が大変なんだ。年に一度の信者の歡喜の後仕末は、講中の若い衆がしなければならぬ。それぞれ

まあ、この夜だけは何処の誰と知らない相手と寝ても、誰も不義をしているなどと言わない。いわば天下公認の女子の性の解放の日だもの……。これは何時ごろからこのようになったのか知らない。ワダシが三十代で講中の役員になつた時には周知の事実で、新米は腕に講中と書いた腕章をつけて事故があつてはいけないというわけで境内を二人一組で一時間置きぐらいに巡回するのだが、あつちこつちに油紙を敷いて大きな風呂敷で身体を覆って、重なり合っているのを見て、身体がカッカッと火照つたものだしや……。

これは、誰が決めたという事ではなく自然に（暗黙の）ルールがあつてのう。一晩に一人しか相手にしないこと。誰と寝たという事は、口が裂けても言わないこと。これは知らない相手と抱き合った時の場合だが……。

まあ、年に一度の女子の性の解放は決してみたらなものではない。キチンとしたもんだ。——昔は、親が決めたとおり嫁に行かねばならなくて、なんぼ好きだ馴染コあつても一緒にいられなかつた。嫁に行つた晩げにはじめて男の面見たというのが数多くあつたもんだ。そういう女は、せめて一夜だけでも好きであつた人さ抱かれてみたいという時は、旧六月二十三日の夜賽の河原さお参りにくれば、誰に言われる事もなく目的が達せられるのだ……。それから、旅（他町村）から来た人（ほとんどは女の人）は、風呂敷包にニギリメシ、その中には必ず梅干しを入れて、それに油紙は欠かせないもんでした。油紙は、ご存

カケゴ（魚籠）を腰に下げて、その頃は、ビニール袋も肥料の空袋も無い時代だ。広い境内を五〇六人の若い衆が梅干しの種とゴムサックを探し歩いて拾い集めるのだ。……それでも後日小学校の先生から講中の方へ申し入れがあつて「子供たちが学校で風船をふくらませて遊んでいるのを、よくよく見たらゴムサックだった。どこから出した、と聞いたら賽の河原から拾つて来たというだ。講中でも気をつけてこんなものを落して置かないよう注意してください。」だとき。これほどの広い境内だもの、見落しがあつて無理ないと思うよ。仏様が授けた功德の結果だもの、みんなで大目に見てもらいたいよ。

——さて、ワダシが五十年近い講中役員をしている間のうち忘れる事の出来ない大事件があつたなあ。……それは、確か戦争中の時だったなあ——お堂の中の人影も薄くなって、諷誦文書きの坊さんも講中役員もヤレヤレ一服という時に、外回りの若い衆が賭け込んで来て「大変だ、変なうなり声を出している組がいる！」というので、病気にでもなつたのかと思つて二〇三人の役員と一緒に走つて行つてみると、堂の裏側の丘の陰の方で重なり合つて男の方が今にも死にそうなりめき声を出していたのだ。「どうしたば？……。」と声をかけると「……抜けなくなつた。」というんだ。さあ、それは大変というので、若い衆を村へ走らせ、荷馬車に長持をつけてくるように命じた。とつさの判断だが、長持を持って来いと云つたのは我ながら気が利いたもんだと、後で他の役員方からも誉められたよ。

待つ時間は長い。その間、人が近づかないように役員の人たちが周囲を固めていたね。何か異常な出来事が起ったと感じた人々は遠巻きにして見守っている。ようやく来た荷馬車の上の長持ちの中へ、男女二人をそっと入れて、若い衆三人に役員一人をつけて五所川原の病院まで運ばせた。

——金木には町医者だけで病院もなかったし、それにそんな姿が噂話になる事を恐れたからだ、遠い道を五所川原まで連れて行ったことは果して正解であったかどうか……。女は男の胸に顔を押しつけたまま、一度も顔を上げなかったし、男の腰に強く抱きついていたので、持ち上げた若い衆の話によると、三人掛りで、一人は頭の方、一人は腰、一人は足という風に、一、二の三で長持ちに移したのだが、米俵よりも、丸太を持ち上げるよりも重かったと言っていたね。

【最新川倉賽の河原風景】

平成十年（一九九八年）の旧暦六月二十三日は新暦の八月十四日であった。今年の天候は不順、朝晩低温で日中も二十六、七度Cになった日は数えるほどしかなかった。梅雨明けが宣言されないうちに秋の気配、こんな異常な日が続いた。この日も朝方雨で午後には晴れてきた八月十二日の午後、十何年ぶりに川倉賽の河原地蔵堂を訪ねてみた。

① 山門 先ず最初に目に入ったのは山門、変わった山門である。両脇に「阿・云」の仁王像が立っている。門の上には天台

てきた参道の老松の並木は、左側に押しやられ、山門から本堂へと広い参道が造成されていた。

② 川倉賽野川原地蔵尊案内板 にはこう書かれている「ここ川倉の賽の川原は慈覚大師の開創と伝えられる点は下北の恐山と同様であるが、天空からお燈明が降り、握ると一体の地藏尊が出土、これを安置したのがその始まりともいう。文化・文政の頃から参詣人が増えたということから、およそ一七〇年も前から民間信仰のメッカとして支えられ、例大祭（旧暦の六月二十二日より二十四日まで）

には多くの参拝者で賑わう。特に鎌倉時代以前からいたとされる巫女（イタコ）の口寄せ（霊媒）も行われる場所となっている。」下段にローマ字で書かれ、日本人だけでなく、広く外人にも案内している。信仰というより観光宣伝の一端か？

金木郷土史には「前略——現在の姿になったのは雲祥寺十五世愚全和尚、或いは十六世夫栄山和尚

川倉賽野川原地蔵尊

ここ川倉の賽野川原は慈覚大師の開創と伝えられる点は下北の恐山と同様であるが、天空からお燈明が降り、握ると一体の地藏尊が出土、これを安置したのがその始まりともいう。

文化、文政の頃から参詣人が増えたということから、およそ170年も前から民間信仰のメッカとして支えられ、例大祭（旧暦の6月22日より24日まで）には多くの参拝者で賑わう。特に鎌倉時代以前からいたとされる巫女（イタコ）の口寄せ（霊媒）も行われる場所となっている。

KAWAKURA SAI-NO-KAWARA JIZOSON

Sai-no-kawara, a holy ground, is said to have been founded by master Jikaku-Daishi, the same person who founded the other holy ground known as Osorezan in the Shimokita Peninsula. Some people believe a ray of light from the sky lit this place and later the Jizo (Guardian Deity of Children) was discovered under the ground. Since the Bunkei-Bunsei Era (early nineteenth century) this place has been known as a Mecca for people whose relatives weren't able to die in peace. It is also known as a link between the living world and the deceased world. Thousands of people come here to worship during the soul festival (June 22-24 of the old calendar). And this place is also historically famous for being the home of the medium (Itako, Woman) since the kamakura Era (twelfth century).

女は、親の決めたところへ嫁にやられ、幼な馴染みの男に赤紙（招集令状）が来て、八月末（新暦）入隊が決っていたそうだ。これが今生の別れになるかと思いきわす力が入ったのだろう。わかるような気もするね。

こんな話は、枝葉がついてたちまちのうちに広がるもんだが、現場を見ていた人たちも、明日は我が身になるかも知れないと思つたものか、誰も噂を流した者は居なかったようだ。ヒソヒソと語られていたかも知れないが、同情の目で見ていて、面白半分に言う人はなかったようだ。……それも地藏尊信仰を持つ人々だからこそである、ワダシは思っている。

ここ川倉賽の河原の地は、旧六月二十三日夜、女子の性が解放される聖なる土地ですじや。》

宗糸の目枝

神社の鳥居に見られるような形の合掌形が乗っている。

数百年の時を見



の頃からとすれば（東北大学楠助教教授談、中外日報紙に詳細報道されている）なっとく出来よう。随って開創は慈覚大師、中興は雲祥寺開基繁翁茂和尚、再中興は雲祥寺十五世或いは十六世とするのが定説である。——後略）

慈覚大師（七九四〜八六四年）は第三世天台宗座主で円仁という僧である。

金木郷土史によれば、「川倉村は寛文四年（一六六四年）津軽郡高辻村之帳に、初めて「川倉村二百二十石五斗」と表れている。川倉村の名称は、津軽三代藩主信義が、正保年間に津軽統一までの戦没者の供養と、地元開拓事業に汗を流し死んでいった農民を供養するため、川倉観音の勧請にはじまるとされる。とあるが、読者は、慈覚大師の生存した時代と川倉村の記録に表れる年代に約八百年の差はあるが、地藏信仰の伝承と理解すべきであろう。

③ 本堂と御本尊 本堂は昭和五十七年（一九八二年）に改築され、それを記念して建てられた石柱には「賽の河原地蔵尊」と表記され、側面に昭和五十七年旧六月二十二日 本堂改築記念とあり、又大工松川建設松川秀一、大工泉谷建設泉谷則昭、石工板柳町安田石材株式会社と刻まれている。

御本尊は、身代り地藏とも延命地藏とも言われている。本堂に入って正面に御本尊、左右二体づつの石地藏も安置されている。これは数十年前から変りはないようである。物の本によれば、地藏信仰は平安時代中期より高まり、この世とあの世との

境にいて、冥途に行く者の苦難を救うという地蔵の性格は、道祖神の信仰とも結びついて、地蔵像のほとんどが村境や道の辻



にまつられていてののだという。御本尊について

はいろいろな伝説がある。これも金木郷土史の中の一節である。「——大師自作の石像地蔵尊が明治中期まで祀られてあった。（賽の川原代表役員中谷定五郎翁談、昭和四十六年五月九十六歳で没）その古来からの地蔵尊像は現在紛失してないが、その理由として中谷翁の談によれば、明治二十年頃藤枝村の某信者が（特に名を秘す）病氣平癒祈願のため同家に拝請し、供養のあと箱舟に乗せて藤枝溜池横断の帰途、中程で水中に取り落したといわれている。その後数回さがしたが、いかに発見できなかつたという。これから考えると本尊は身代り地蔵尊らしく、その大きさも一人で持ち運べる程度のものであったと想像される。」



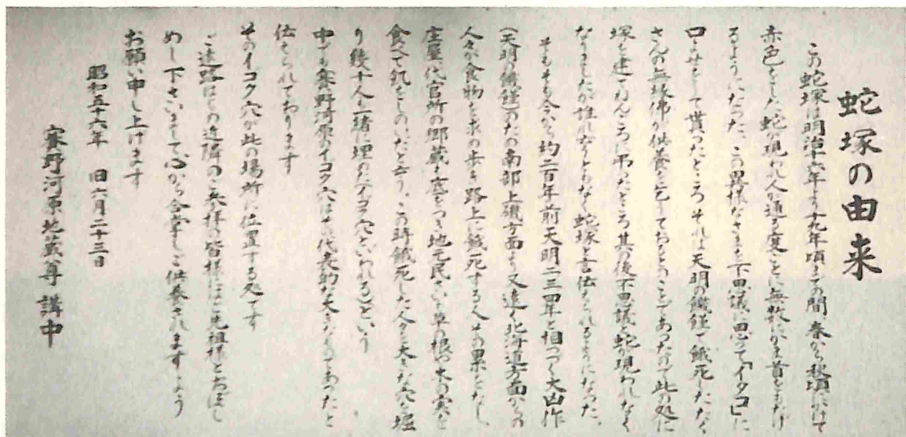
嘉瀬にはこんな伝説が残されている。小栗崎村に数百年も経ったと思われる楠の木があった。明治の中頃川倉の地蔵尊が紛失したと聞き、嘉瀬の賽の河原（現

在の第三保育所の前）と一緒に川倉の賽の河原本尊として木像の地蔵様を寄進しようとする信者たちが相談して、その楠ノ木の巨木を切り、一本の木からそれぞれ丈余の大きな木像地蔵尊を二体作ってもらい、根本の方からは嘉瀬の賽の河原へ、上の方は川倉の賽の河原へ安置したという。その後昭和五十年代嘉瀬の賽の河原の地蔵尊は火災で焼失した。川倉の賽の河原の地蔵尊はその後どうなったのか？

蛇塚の由来

④ 蛇塚の由来説明板と無縁仏供養之碑 本堂の南側に昔はイタコの小屋が建てられた小さな広場の南東の少し下ったところに、蛇塚の由来と書かれた説明板が建てられている。それには次のように記されている。「この蛇塚は明治十六年より十九年頃までの間春から秋頃にかけて赤色をした蛇が現れ人が通る度ごとに無数にかま首をもたげるようになった。この異様なさまを不思議に思っ

て「イタコ」に口寄せして貰ったところ、それは天明の飢饉で餓死したたくさん無縁佛が供養を乞うておるとのことであったのでこの処に塚を建てねんごろに申したところ其の後不思議と蛇が現れなくなりりましたが誰れ云うともなく蛇塚と言ひ伝えられるようになった。



そもも今から約二百年前天明二、三、四年と相続く大凶作（天明の飢饉）のため、南部上磯方面より又遠く北海道方面からの人々が食物を求め歩き路上に餓死する人その累をなし、床屋、代官所の郷蔵も底をつき地元民さいも草の根や木の実を食べて飢をしのいだと云う、この時餓死した人々を大きな穴を掘り幾十人も一緒に埋めた（イゴク穴といわれる）という。中でも賽の川原イゴク穴はその代表的な大きなものであったと伝えられています。

そのイゴク穴が此の場所に位置する処です。

ご遠路はじめ近隣のご参拝の皆様にはご先祖様とおぼしめし下さいまして心から合掌しご供養されますようお願い申し上げます。

昭和五十六年 旧六月二十三日

賽の河原地蔵尊講中

道路をはきんで北側に「無縁仏供養之碑」が中央に、左右に大・小二体の石地蔵が安置されたお堂がある。

⑤ 後生車 蛇塚の説明板からすぐ西側には「後生車」が林立している。これは確か昔からあったもので、もう車が数十年の年を経て錆で薄くなってしまったのや、針金で輪を作ったようなものまで数十本見られるが、唯不思議なことには新しく建てられたものが見当たらない。それに代ってか卒塔婆が二十何本か立っており、変わったところでは「世界人類が平和でありますように」と仏教徒以外の方の建てられたものも見られる。

「後生車」はこの村にも、村はずれの石地蔵様の脇に立っているのを子供の頃の記憶から、その車を廻して止り方が静かに止れば極楽、逆戻りすれば死んでから地獄へ行くのだと聞いたものである。

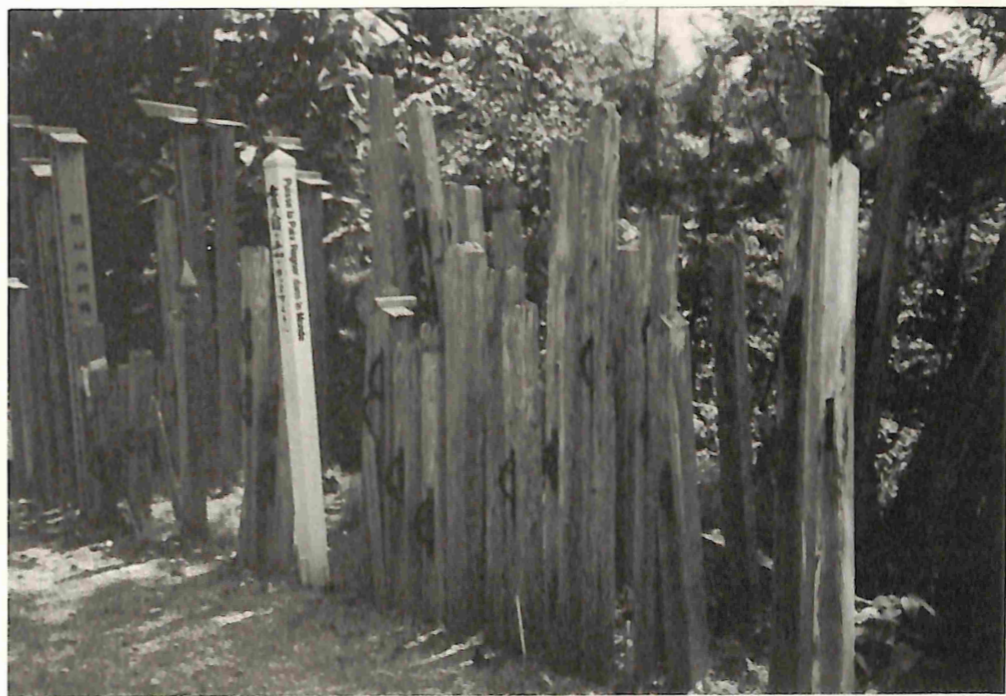
死後極楽に生れること、来世の安楽、極楽往生願う。ために建てられた後生車と死者の菩提を弔う卒塔婆も最終的には同じ意味を持ちものであるのだろう。



(坐 女)

けることも出来ない賑いぶりであった。それが本堂の改築で敷地がせまくなった関係からか、今はイタコ小屋は本堂のすぐ後に建てられていた。八月十五日の午後に行ってみたら、既に多くのイタコは帰った後で、一人だけ口寄せをしていた。それを外人がビデオで撮している場面を写させてもらった。

⑦ 賽の河原 妻の神川から登る旧道路の両側には石が積み重ねられた河原がところどころに小さな石地蔵が立ち、写真に見える風車の場所は石の積み重ねられている場所である。これも昔とは大



(後 生 車)

⑥ 巫女 昔は後生車の前あたりに巫女の小間が十以上も並んでいて、仏おろしをする人々や、見学に来た人たちで通り抜



(石が積まれた賽の河原)

きな様変りで、風車が建てられるようになったのは何時ごろからなのか。「二重積んでは父の為、二重積んでは母の為、積み崩され……」のイメージは全くなくなり、何か華やかな風景に見えた。

⑧ 水子地蔵堂と賽の河原事務所 水子地蔵堂も事務所も本堂改築後に建てられたものであろう、事務所は昔も平家建てで線香・ローソク・草履など売っていたのを記憶している。今は二階建て階下は売店で、前記の品の外に手拭いや本なども並べら